

主題	利用者・家族と施設を繋ぐ質の高い記録を目指して
副題	ショートステイの記録を通じて利用者・家族支援を見つめ直す
ショートステイ 記録	

研究期間	3ヶ月	事業所	指定介護老人福祉施設　こぐれの里
発表者：　倉田　昌（くらた　しょう）		アドバイザー：	
共同研究者：今野　貴之			

電 話	03-3925-0477	メール	
FAX	03-3921-4373	URL	

今回発表の事業所やサービスの紹介	こぐれの里はユニット型全室個室の施設として特別養護老人ホームと併設のショートステイサービスを運営しています。H24年3月までは1F・2F合わせて6ユニット（各ユニット定員は9～10名）のうち、各1部屋をショートステイ居室として配置していましたが、H24年4月より2Fの1ユニットに入所者3名が混在する準ショートステイユニットへの集約を実施し現在に至っています。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

当施設は介護記録・申し送りについては基本的にPC上ですべて行っているが、ショートステイ（以下SSと表記）集約以前は、短期利用者については、紙ベースでの記録の入力・閲覧が主で、利用者・家族への利用記録についても紙ベースで記録した原本のコピーを渡し対応していた。

しかし運営再編後のユニット集約化に伴い、業務的に煩雑・対応が困難になることから、入所者同様にPCベースでの利用記録、施設内記録・申し送りに移行したものの、

①移行当初PCのケース記録をそのまま落とし込む形にした為、一部家族から利用中の様子が分かりにくいという指摘が出たこと。

②職員側の課題として、短い期間で次々と利用者が入れ替わり、在宅での介護状況等、情報を都度収集、把握することが求められるSS利用者への記録方法や情報量の多さに起因する、見落としや不備によるケアの質の低下

や、種々のリスクが増大する懸念があり、これらの問題に対応するための方法やシステムを確立することが課題であった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

【目標】

記録に対する意識の向上を通して記録を通じて家族のニーズや要望に応えられる為の介護・利用者支援の質の向上を図っていき、さらに在宅生活を支える有効な情報提供や支援につなげること。

【期待する成果】

①職員側の情報収集方法や記録をする上で留意している点や記録に求めている情報を把握し、在宅での生活を含めた介護支援を行う上でより有効な方法やシステムを明らかにする。

②利用者及び家族側は利用記録に何を期待しているのか。不足・不十分と感じる部分はないのかや改善を求める点はどのようなことかを把握する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

① 研究対象

H24 年 4 月から H25 年 6 月まで利用履歴のある SS 利用者家族と、H25 年 4 月現在在籍の介護職員計 30 名

② 取り組みの方法

- 1) 介護職員へアンケート用紙を配布（1 回目）。アンケート内容は SS 利用者への介護・支援を行う上で留意していること、不安に思っていること等について選択及び自由記述回答によるもの。
- 2) 家族対象者にはアンケート用紙を郵送にて実施。アンケート内容は家族のニーズや要望点についての質問項目への選択及び自由記述回答によるもの。
- 3) 2) の内容及び項目を質的に分析し、結果を介護職員へフィードバック。フィードバック 1 カ月を目途に再度介護職員へアンケートを配布（2 回目）し、フィードバック前後で介護・支援の意識や行動の変化を評価する。

《4. 取り組みの結果と考察》

①利用者及び家族側

食事や排泄の記録といった基本的な事項など利用中の体調面での様子や変化を把握する以外に、体操や書道など種々の活動に参加したかや、他利用者との関わりの様子、歩行や立位状態などといった機能面の様子など数値に表われない利用者の「生活全般」の情報をより詳しく伝えてもらいたいと感じていることが分かった。

②職員側

SS 利用者を支援していく上で、在宅で状況や嗜好するもの等より詳しい情報を求めていること、また継続利用者でも入所者と違い支援が途切れること・新たな状態の把握などを短い期間で行う必要があることに戸惑いや不安を感じている現状がわかった。

《5. まとめ、結論》

三大介護（食事・入浴・排泄）に代表される職員と利用者が直接関わる介護技術は、その

習得に対する動機付けや意識の向上への取り組みも活発であり、実習や資格取得の際等で学ぶ機会も多い。しかし継続した介護・支援を行う上で重要な要素である情報共有、支援を振り返ること、支援や行動を行った証しとなる等、記録は介護や支援を行う上で欠かせない要素である。

この取り組みを通じ介護のプロとして関わった支援内容や利用中の様子を家族に分かりやすく伝えることを意識し、また積極的に発信することで、在宅での生活を含めた利用者の“生活の全て”を支えるひとつとして大きな役割を担えることが理解できた。こうした理解をもとに今後も継続して実践し、信頼感・サービスの向上に繋げていきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

倫理的配慮として本研究発表を行うにあたりアンケートの結果やヒアリングの内容について本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し回答をもって同意を得たこととした。

《8. 提案と発信》

利用者の生活全てを支える上で、SS のみならず、デイサービスなど「施設」と在宅での生活の状況や様子が双方で有機的に共有されることで、質の高い支援体制が形作られるのではないかと。またそうした取り組みを通して最期まで地域で生活し支えていくことの礎になるよう今後も取り組んでいきたい。

【メモ欄】